方向

第一五三号　一九九三年二月二三日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

フレネ自由学校

1993 02 09　原田　慶

フレネ学校は、南フランスのバンスという町にある自由教育の学校である。テレビで子ども達の様子が放映されたり、学校の経済的な危機が新聞に報道されたこともあったので、その存在は日本でも多くの人に知られていると思う。

生徒数はおよそ六十人、三クラスに分けられていて、三歳から五歳の年少組、六歳七歳の年中組、八歳から十一歳の年長組であるが、これはおよそで、その子どもの進みぐあいによって年齢は入りまじっているそうである。

この学校に日本人として初めて、原知野（ちの）、小枝（さえ）という十歳と八歳の姉妹が入学した。その体験を両親の原章二、光枝夫妻が、こまかに記載した日記の中から編集した『フレネ学校と子ども達』（青弓社）、学校の生活をわかりやすくまとめて説明した『フレネ自由学校だより』（あゆみ出版）という二冊の本と、エリーズ・フレネ著『フレネ教育の誕生』（名和道子訳・現代書館）それとビデオテープ『フレネ学校の子どもたち』一巻を比留間恭子さんに貸していただいた。三冊の本とテープを見てわかったことを少し書いてみたい。

知野、小枝という姉妹がフレネ学校に入学したのは一九八七年九月のことで、章二氏の仕事の都合でフランスに行かれたようである。バンスでは家族みんながよく学びよく遊び、さまざまな人達との交わりを深められたら

しくて、その様子がくわしく手にとるようにわかりやすく記録され、楽しい本になっている。町の人達はこだわりなく原一家を受入れてくれたらしくて、特別に親切なわけでもなく、まったく自然な感じがする。自動車のドアをこじあける泥棒もいれば、自分の都合を押しつけてくるクラスメートの親もいる。原一家はずいぶん旺盛に近くの町を見に出かけたり、海で水泳もした。ドライブやハイキングもたびたび試みた。とにかく二年間は特別の毎日だったようである。

フレネ学校は、朝八時三十分に始まり、午後五時三十分に終る。一日の学校生活が長い。水曜日は半日、土曜、日曜は休みである。いっせい授業は行われず、教壇もない。子ども達は各自、自分で作った自分の計画表にそって勉強する。個人学習の時間には、算数をしている子や地理を勉強している子どもなどさまざまである。自分の学習は自分で評価するが、その時に先生や友達の意見も聞く。学習中は先生は子どもの中に居て個別指導をするのである。生活の中で困ったことがあれば、生徒集会で問題にしてみんなで話しあって解決する。個人的なことは、両親と先生との個人面談の時間が、申し込めばいつでも用意される。また自由研究発表という時間があって、これは子どものえらんだ自由なテーマを、親が協力して調べて発表するもので、子どもが発表する時には親も参加して助言することになっている。知野は「日本について」小枝は「バイオリン」という題で研究発表をしたそうである。

フレネ学校の特徴の一つに、自由作文がある。毎朝、みんなが作文を書く。長さは自由で、三、四行から二百字というところ。学校や家庭で見聞きしたこと、覚えたこと、感じたこと、夢に見たこと、願ったことなど自由

に書くが、この作文の時に、先生が個人指導をして、言葉の使い方、適切な文章表現の仕方などを教える。文に書こうと思えば誰でもよく考えるし、注意深く見、聞き、覚えておこうと努力する。それが大切なのではないだろうか。

短い凝縮した文章をたくさん書くことは、実に勉強になります。この自由作文で子どもの生活と学習がつながり、作文の勉強という狭い枠でなく、子どもの世界が表現を得ます。

と原氏は書いている。さらにフレネ学校では、毎日みんなに書かれる作文の中から、一つだけよい作品をえらんで、当番の子どもが活字に組み、印刷する。印刷されたものは、学級記録にはり、学校通信にのせられる。

自由作文は例えば次のようなものである。日本訳は比留間恭子さん。

★　　アマンディーヌ　五さい

海は
とても風がつよかった！
波も大きかったけど
すごく遠くまで行ったよ…
ママが抱いてってくれたの！

★　　ヴァンサン　六さい

アステリックス公園で

ぼくは
海賊船にのったり
空とぶいすにのった。
古代ローマ人に
あかんべえした。

★　　ナタリー　　十さい

パパはおこる
ママは叫ぶ
妹は泣く
そして、あたしはね、笑ってるの

フランス語のほとんどわからなかった知野と小枝は、題材にも、作文にも、ずいぶん苦労したようである。初めは両親が手伝って、あらかじめ家で書いて行ったりもしたらしいが、だんだんとフランス語がわかってくると、自分達だけで先生に言葉を教えてもらいながら書けるようになり、一年の間にフランス語の日常会話や作文に困らなくなったというから、子どもの進歩はめざましい。

しかし、二人がフレネ学校に入学したのは、フランス語を勉強するためだけではなかった。フレネ学校は自由学校、つまり子ども達に自由に作業させる中で、自分で考え、自分で判断する力を養う、その子どもの個性を大

切にする教育なのである。子どもを教育せず放任したら、もちろん無知で粗野な人になってしまうが、子どもが自分で計画をたてて学習し、その作業のあとを自分で評価し、。友達の意見も聞いて互いに批評しあいながら自分を育ててゆく、このように自分から進んで学習する教育が実行できれば本当に理想的だと思う。

フレネ学校の子ども達をビデオで見ると、みんなおだやかで平和である。一人ひとりの人格が認められているので雰囲気が温かく、批判しあっている時もゆったりしていて感情的にならない。この様な教育を幼い時に経験した子ども達は大人になっても本来の人間性を失わず、豊かな生活をすることができるようになるのではないだろうか。

ただこの教育をするためには、教師一人が受け持つ人数があまり多くてはできないし、教師には広い教養と豊かな人間性が要求される。またなにより社会の理解が必要である。どこの国でも知識偏重の画一的な教育を好む傾向が強いようだからである。フレネ学校のような教育をすることがどんなにむつかしいことかがよくわかる。

それではフレネ教育はどのようにして今日まで来たのだろうか。その歴史と苦難を語ったのが『フレネ教育の誕生』である。フレネ教育の創始者セレスタン・フレネ（一八九六―一九六六）は、第一次世界大戦で兵士として戦い、肺を撃ち抜かれ毒ガスを吸引するという大きな障害を負ったのだった。立っていることさえつらい身体で、彼は小学校の教師となった。学習意欲もない無表情な子ども達を生き生きと進んで勉強する子どもにするために、フレネは教室から子ども達を外へ連れ出した。町に出て直接、大人達に話を聞き、子どもが自分の目で見て知ったこと、わかったことを何でも作文させた。そして子ども達が自分の手で活字を組んで印刷し、他の学校

と通信したり、町の人々に読んでもらった。このような生きた教育が、子ども達の自発性を導き出し、みんな活発に勉強するようになった。しかしフレネのやり方は町の権力者達の反発をかい、さまざまな弾圧を受け、時には生命の危険にさらされることもあった。このようなフレネを常に支えたのが妻のエリーズである。

現在のフレネ学校を経営しているのは、フレネの長女、マドレーヌ・バンスという人だそうであるが、一九三五年、三十六歳のフレネが公立学校を退いて、四人の生徒から始めたフレネ学校は、今も経済的な理由などで、時には存続が危ぶまれているようである。フレネは自分の信念をまげず、弱い身体で七十歳までの生涯を自由教育のためにささげたのだった。

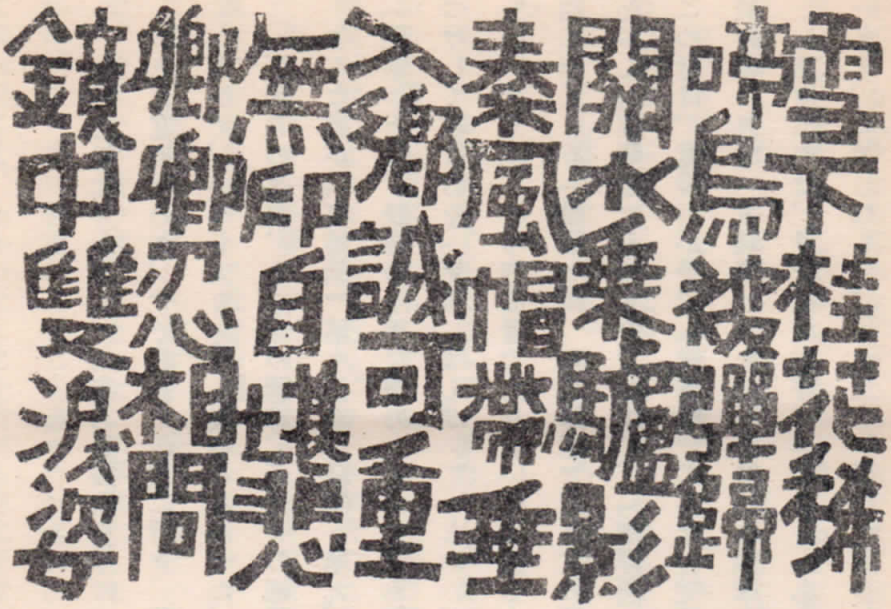
人の精神というものは、その中に何かものを貯えるための倉庫ではなく、人を生き生きと養うために燃え立たせる焔だ。

とフレネは言っている。またエリーズは書いている。

生きる。できる限り力強く生きること。それはつまり私たちの努力の目標ではありませんか？　そしてそこに到達する可能性を最大限に広げることが学校の根本的な義務ではないでしょうか。

これがフレネ教育の目標だったのである。できる限り力強く生きる。この人間本来の目標を見失わない教育こそ本当の教育と言わねばならない。

一人ひとりを大切にする教育、それは人間教育の永遠の理想なのである。短期間ではあってもフレネ学校で学んだ知野、小枝姉妹が現在どのような生活をしておられるのかを聞いてみたい気がする。



山本のぶを刻

李賀　出　城

詩人山本のぶを氏は、わたしの訳詩集『蓼莪集』のなかから李賀の詩を選び、その原文を木版に彫刻して、年賀状にあてておられ、それがもう十年にちかくなっている。印刻された文字は六朝北碑に似て、奇古を愛した昌谷の作を写すにふさわしい。今年のは「出城（まちをいでて）」で、わたしのつけた訳は、

雪の下に桂花（もくせい）稀に　啼きし烏弾（う）たれて帰る　関の清水に驢馬に乗る影　都ぶりの帽の帯垂る　ゆゆしかるわれの帰郷に　官（つかさ）の印（しるし）なきぞかなしき　しぬびかにきみはや問はめ　涙ぐむ鏡の人に

三十年前のものとはいえ、意味がとおりにくい。改訳すべきときがきているのであろう。

（1998 02 15　原田憲雄）

仏教音楽（中国の詩人と仏教　二八）

1993 02 02　原田憲雄

永明七年二月十九日、司徒の竟陵文宣王は、仏前で維摩の一契を詠じる夢を見た。それにあわせて声を出すと目覚めたので、すぐ起きて仏堂に行き、夢の中でのやりかたでさらに古維摩一契を詠じたら、韻声がなめらかで、いつもよりとても素晴らしかった。夜が明けるとすぐ都の美声で知られる沙門の、龍光寺の普智、新安寺の道興、多宝寺の慧忍、天保寺の超勝、安楽寺の僧辯らを集め、検討して新曲を作らせた。

こんな話が『高僧伝』第十三巻「経師」第九、釈僧辯の項に見えます。これだけでは分かりにくいでしょうが、「経師」とは、読経の上手な僧のことです。お経だけではなく、それぞれのお経にちなんだ偈頌（讃仏歌）に節づけして歌うのを「梵唄（ぼんばい）」といい、また「経唄（きょうばい）」とも「声明（しょうみょう）」ともいいますが、その作曲者であり歌い手である人たちなのです。永明七年は四八九年。竟陵王は三十歳でした。話に出てくる「維摩」は、『維摩経』だとすればそのうち詠唱するにふさわしい一節を指すのですが、ここのはたぶん『維摩経』そのものではなく、『維摩経』にちなんだ梵唄なでしょう。「契」は、梵唄を数える単位です。この話は、竟陵王が夢で『維摩経』にちなむ梵唄をつくり、声に出して歌っていると目が覚めた。その新しい梵唄の歌い方で「古維摩」すなわち伝統的な維摩の梵唄を歌ったところ、とてもうまくいった、というのでしょう。

『高僧伝』は、竟陵王が太守だったこともある会稽の、嘉祥寺の僧の慧皎（えこう）が、梁の天監十八年、五一九年、に著したもの。話は三十年後に記録されたわけですが、事情を知る人々のなお生存中のことですから、

伝えとして信頼度の高いものといえましょう。同じ巻の「釈慧忍」の項にも、

斉の文宣が夢に感じて後、多くの経師を集め、慧忍も加えて古い梵唄を検討し、新しい別の曲を考案させ、「瑞応」という題の四十二契を製作した。慧忍の作品がもっとも優れていた。そこで四十人余りの僧を選んで慧忍についてこれを学ばせた。

というのです。慧忍は僧辯の弟子です。僧辯は古来の梵唄の伝承に詳しかったのですが、慧忍は新曲の調製に巧みだったものとみえます。しかしこのとき僧辯も「瑞応」の七言偈を一契つくっていて、「古維摩」とともに、かれの演目として喧伝されたそうです。七言偈の梵唄演奏は、七言の詩の流行をほのかに予告するようです。

偈頌の歌詠は、インドでは仏教以前にバラモン教で盛んに行なわれていました。釈尊は、弟子たちにバラモン歌詠を禁じていましたが、跋提という比丘が釈尊の教えを梵唄として歌うことを願い出ると、

汝に声唄をなすことをゆるす。唄に五の利益あり。身体疲れず。憶うところを忘れず。心疲労せず。声音壊れず。語言解しやすし。……諸天、唄声を聞かば心すなわち歓喜せん。

といって許した、ということが『十誦律』第三十六巻に見えます。中国では、魏の曹植が魚山で空中に梵天の声を聞き、その曲調をまねて最初の梵唄を作った、という話を、本稿の（八）で述べました。曹植が中国での梵唄の祖であるかどうかについて疑義の出ていることも、そのときに触れましたが、いずれにしてもかれの前後に西域からの僧たちによってインド発祥の梵唄が中国に伝えられたことは間違いなく、以後、僧から僧へ伝えたのでしょうが、貴族や官僚、知識人が仏教を研究し、信仰するようになった、東晋末から宋・斉にかけて盛行したこ

とは、「経師」と呼ばれる読経や梵唄専門の僧がこの時代に現われたことからもよく分かります。享受する人が多ければ、作る人や演じる人も多くなり、作品の質も高まり、演技も深くなるものです。東晋の末というと、廬山で慧遠が唱導文学の「帰去来調」を始めたときに当たります。「帰去来調」が梵唄の一種なのか、もっとくだけた俗謡調だったのかは不明ですが、同じころ都の建康を中心に経師が活躍し、宋を経て斉に入り、竟陵王の熱心な万添えによって梵唄は最高頂に達したようです。

経師は、詠唱や作曲だけではなく、作詞もやったのでしょうが、竟陵王が梵唄に関与するようになってからは、王はもとより、例の八友らも梵唄の歌詞を作ったようです。かれらはいずれも王の相伴をして法要に参加し、梵唄を聞いているのですから、おのずから興味も湧きましょうし、王がかれらに作詞を勧めもしたから、作品が増え、それらはたぶん坊さんの作ったものより文学的で、僧俗ともに多くの人々の興味をひきつけたに違いありません。『出三蔵記集』が伝える竟陵王の著作に「讃梵唄偈文」一巻「梵唄序」一巻があり、これらはおそらく新作梵唄集につけた序文を集めたものであり、「転読法并釈滞」一巻は読経の発声法に関する著作です。梵唄集には王の作品も入っていたはずですが、すべて失われました。けれども、八友のひとりであった王融の詩集に「法楽辞十二首」や「浄行詩十首」が見え、新作梵唄の歌詞だったろうと察せられます。「法楽辞」は釈尊の生涯を歌ったもの、「浄行詩」は竟陵王の仏教論文『浄住子浄行法門』にそえたもののようです。ここにはその見本として「法楽辞」の第一首「本起」を掲げておきましょう。

天長命自短　　天ながく命みじかし

世促道悠悠　世はせまく道はるかなり
禅衢開遠駕　禅にひらく修業の旅路
愛海乱軽舟　愛欲の海に小舟はみだる
累塵曾未極　煩悩の塵きわまらず
心樹豈能籌　心の樹はかるべけんや
情埃何用洗　垢づきし思いすすぐは
正水有清流　正法の清き流れぞ

中国の詩人が、インド伝来の仏教音楽に直接関与したことは、かれらに言語や音楽についての知識の拡大と反省をもたらします。中国の音楽とは違うリズムやメロディーに中国語で歌詞をつけるには、はじめは直感に頼って間に合わせていても、作品が多くなれば、中国語の音韻を分析的に見直すことが必要になってきます。その場合にも教師がいなければ仕方がないのですが、斉の都の建康にはインドはもとより西域諸国の学僧たちが集まって竟陵王の法会に招かれているのです。かれらは基礎教養としてインドの言語学を学んでいるのですから、中国の詩人たちの疑問に答える教師として申し分ありません。詩人たちはこうして中国語を見なおし、梵唄用だけでなく、中国の詩に使う言葉としても分析考察するようになるのです。謝霊運にすでにその試みがあったと察せられますが、理論としてはっきり提示するのは竟陵王の八友の一人であった沈約です。

※前号正誤　一五頁一行　992 01 02 → 1993 01 02

初　度

1993 02 08　　原田憲雄

一六世紀末の中国の詩人、中郎（ちゅうろう）・袁宏道（えん・こうどう）の詩集を読んでいたら、「丁酉十二月初六（しょろく）初度（しょど）」と題する五首に目がとまった。この「丁酉」は明（みん）の万暦（ばんれき）二十五年。「初六」は月の初めの六日。「初度」とは「初めの条件」という意味で、前四世紀の詩人屈原（くつ・げん）が代表作「離騒（りそう）」の発端で、自分が寅年の正月庚寅の日に生まれ、父親が自分の「初度」を考えてよい名前を選んでくれた、といっていることから、やがて「誕生日」という意味に転用されるようになった。

雪霽寒江饌得魚　　雪霽れて寒き江にさかなにせむと魚釣れば
北風香墮蝋梅初　　北風は吹き下ろす咲きそめし蝋梅の香

はいいが「双鬢蓬蓬また一たび新たなり」とか「闊帽寛衫は老年に似たり」など、じじむさそうな句をまじえるのはどうしたことか。かれは数えの三十、この誕生日で満二十九歳になったばかりである。二十五で高等文官試験に及第し、二十七で呉県の知県となり、政績はあがった。文学者としては、古典の模倣を排撃し、自由な表現を鼓吹する革新派の旗手として有名だった。ところが仕事が性に合わず、前後七回辞表を出し、この年二月やっと許され、職を離れ、退職金をふところに、江南の山水を遊歴しながら故郷へむけての旅の途中だった。

呉県というのはいまの江蘇省蘇州市で、同じところに上級機関の蘇州府もある。いわば京都府庁もある京都市

のようなもの。知県は市長である。天下の名所だから貴権の往来がはげしく、知県たるもの、そのたびにご機嫌伺いをせぬわけにはゆかぬ。これはまあいつでもどこでも役人にはつきもの。ところが、江蘇は天下の穀倉で、租税の徴収の重要な部分を呉県で担当せねばならなかったらしい。そのうえ時の天子は贅沢好きで、費用を捻出するため次々に新しい税を設けては宦官を使って厳しく取り立てさせる。その窓口にあたって取られるほうの民衆のつらさを直かに見なければならないのが知県である。わからぬうちこそお国のためと精出して働いても、仕事のむごい性格に気づくと、人生いかに生くべきかを真剣に考え、自由を標榜する文学者が、そんなことに努力できなくなってくる。ジレンマを断ち切りたいと思うのも無理はない。やめて十か月遊びまわっても、二年間の役人生活の味気なさ、辛さが、染み込んでとれないまま、おのれがこの世に生を受けた日を迎えた、というのがじじむさそうな句の生れる理由なのだろう。

もっともこのころ「山人（さんじん）」と称して、あちらこちらへ居候をしてあるくルンペン知識人が流行し、ひところのヒッピーの破れジーパンと同じようにむさくろしい姿をして得意がるのもいたので、これも精神的おしゃれの一種かもしれぬ。百歳を越える人が何千といる社会では、若い衆の年寄り気取りは冗談にもなりかねるが、戦前は四十で初老といって不思議でなく、中国では、白髪の心配をはじめるのが三十歳、中郎は現に四十三歳で死んでいるから、これらの詩句も、はなはだしい誇張ではない。

誕生日を祝うことは、いまではあたりまえの風習だが、子どものころは、見かけなかった。あるいはわたしの周辺でだけそうだったのかもしれないが、子どもの雑誌にもそんな記事を見た覚えがないのだから、日本の世間

一般に誕生日なんぞ気にしなかったのではなかろうか。還暦とか古稀とかを祝うことはあった。これも誕生日にちなむものではあろうが、文字通り長寿の人が稀だったから、希少価値を称讃したのだ。ところが戦後のいつのころからか、幼稚園や保育所で児童の誕生日を祝うようになり、若い人たちや大人にまで及んだ。よいことか悪いことかはきめかねるが、生れた日を自覚するための行事とすれば、生活のひとつのアクセントではあろう。

石を投げたらかならず当たるというくらい増えた還暦では希少価値とはいえず、祝うのも笑止だが、そのあたりに「定年」という生計上の切れ目があり、さしかかった人にとってはさまざまに思いの深いことであろうから、それを旧来の「還暦」につないで、いまも存続しているのだろうか。

長生きが普通になったといっても、八十八歳の米寿となると、やはり稀なるものだろう。

今年に入ってから、しきりに米寿々々という声が周囲に聞こえるようになりました。…祝いことばを寄せてくださるので…どのようにして皆さんの御好意にこたえたらよかろうと考えていたら、第二句集の「朝虹」を出して以来、もう十五年も経っているのだから、ここで第三句集を編んでお礼に差し上げてはどうかと、これは息子か娘か、家内かが入知恵してくれ、なるほどそういう手もあるなと思いついたのでした。…では印刷にかかろうかという運びになった時、ふと私は気がつきました。どうせなら家内の句も載せたほうがいいのではないか、米寿に達したのは私一人だけだが、あと一年で家内もそれに追いつくわけなのだから、米寿句集にいっしょにおさめても大しておかしくはあるまいと考えたのです。ふりかえってみれば、偏食で我儘な私がこの歳までの長寿を保ち得たのは、家内が気をつかってくれたお蔭に違いありません。

さきごろいただいた和田利男（杜笙）・すみ子夫妻の句集『米寿閑吟』の、杜笙氏の「自序」の一節である。拝眉をえぬままの長いつきあいだが、一つ違いの琴瑟とは知らなかった。しかし、数々の著書や主宰される雑誌『桑珠』の作品から受けた印象では、たがいの敬愛は唐の詩人の杜甫夫妻を想わせる。夫婦ともにカトリックの信者であって、家を階上と階下に住みわけ、何十年もことばひとつ交さず、寂寥をきわめる老年を送った学者の日常を見聞きしたことがあるだけに、和田夫妻の閑吟はまことに希有なめでたさと、わたしには感ぜられる。

四月十三日、わが誕生日を祝ふとて雨を衝いて子ら寄り集ふ。

米寿祝（ほ）ぐとうからつどへり花の雨　杜笙

睦まじい夫妻には、また親思いの子らが育つのであろう。しかし人生には、そこに生きる人たちの善意や努力でもどうにもならない不幸もまぎれこむ。

思ひ出はすてず供華とす猫じゃらし　すみ子

はそのようにして先立ったひとへのやさしい哀悼であり、忘却へのつよい拒否であろう。

菊咲いて日和さだまる匂ひかな　杜笙

このきよらかなおだやかさと、

額咲いてふち花紅をさしそめぬ　すみ子

のつややかさが、夫妻の長寿を象徴する。

わたしは俳壇と関わりはないのだが、去年は句誌や句集を恵まれることがたびたびあった。前川蒼仮氏の第五

句集『磐盾』は、その前年九十五歳でなくなった著者の集で、義弟にあたる若林芳樹氏の雑誌『燔祭』に遺句の感想「梅干うまし」を書いたゆかりであろう。

ざぼんの実熟れ極りて手に軽し

というような軽みが晩年の作品のよさだったとおもうが、

鼓庵今宵の月をおんひとり

年行くや星なき空のよく晴れて

のごときうるわしい句もあった。この集には、著者の生れた月日は記してないようだ。

永田耕衣氏の句集『狂機』は、その前の自選句集『生死』についての感想「恋猫」を氏の主宰する『琴座』に書いたゆかりであろうか。一九〇〇年二月二十一日生れで、一昨年は九十一歳。

金子晋、即今野老足かけ九十一歳を狼頌するに《旭寿》の二字を発明す。

睡蓮の魂被（かづ）き行く旭寿かな

若くして《根源俳句》を唱え、今も一休を愛し、

ワガ眉毛自転脱落不尽カナ

憤然ととぼけたりけりやんま翁

のような句を、氏の愛用語でいえば《脱糞》さながらに、まきちらす。

衰中郎に「顛狂」の論がある。「狂は仲尼の思うところとなる」というから論語の「狂にして直ならず」をう

け、孔安国の注が「狂は進取」というから、「まっすぐ過ぎ」「つっぱしり気味」ということになろう。顛については実例のひとつとして普化（ふけ）をあげる。生野菜を食っていて「こいつはロバそっくりだ」とからかわれると「ヒヒーン」と鳴いてみせた禅僧である。この論法からすれば、氏のは、むしろ「顛機」というべきか。もっともこんな分別は無用、顛狂あわせて爆発するのが禅者耕衣の狂機なのであろう。

三十になるまでに死ぬだろうと覚悟していたわたしが、あの大戦中に、アメリカの潜水艦に追っ掛けられたボロ輸送船でも沈まず、操縦士の姿のみえる距離からグラマンに狙い撃ちされながら、弾丸ひとつ受けず生き残って、稀ではなくなった七十歳をこえ、まもなく七十五回目の初度を迎えようとは、まったく思いもかけないことである。

それより思いがけないのは旧友森田曠平君が、この四月十七日には満七十七歳というので、毎日新聞社が「喜寿記念　森田曠平展」を主催し、京都では一月二十一日から二十六日まで大丸百貨店で開かれたことである。招待券をおくられ、初日に見にいって、数年ぶりに会うことができた。画家は長生きの人が多く、かれの属する院展でも年長の人が十数人もいそうだから「思いがけない」とは失礼ではないかと叱られそうだが、カタログの年譜にあるように、かれは四歳の疫痢をはじめ、十歳の結核性腹膜炎、十九歳の結核再発と病床のなかで幼・少年期をすごし、その結核再発期からつきあいはじめたわたしの知るかぎり、ふところに薬を用意しない姿を見たことはなく、会って体の不調を聞かないことはなかった。わたしも若いころから病弱ながら、戦死の予感のほうが強かった。しかしかれのはいうまでもなく病気のほうで、あいつは三十までは生きていまいと友人たちがひそか

に案じていたのである。案じた友人が次々に先立ち、いまにも死ぬかと心配されたかれが、ほそぼそと、しかし白金線よりも鋭く強靭に生き延び、華麗な画境を開拓し、歴史画に一家の風を確立し、古稀どころか、喜寿をむかえたのだから、かつて案じた一人として「思いがけない」とまず言って祝意を述べるのは、許してもらえるのではないだろうか。その芸術については専門の批評家が論じている。かれが祖母鹿愛刀自のために「献寿」を描いたように、かれが刀自より長命で精進してほしいと祈るだけである。

さて、これらの祝い事は数え年でしたものだが、このごろは満年齢ですることが多くなったようだ。誕生日にしても、古人のばあい、暦によってそれぞれに数え方が違い、受け取り方もさまざまであるから、数字合わせのようなことは成り立ちにくい。

袁中郎が十二月生れと聞けば、一九〇一年十二月二十七日生れの小林太市郎博士を連想するのだが、博士のは陽暦。中郎のは陰暦だから、陽暦に直せば一五九八年一月十二日にあたり、博士のと結びつかない。中郎の作品の日本での最初の愛読者であり、全集の翻刻者は、京都深草の日蓮宗の僧の元政（げんせい）で、元和九年二月二十三日に生れた。この月日の数字はわたしのと同じだが、かれのは陰暦で、陽暦に直せば一六二三年三月二十三日で、これまた関わりはない。

生れた年に動物の名をつけることは中国や日本にあり、月日に星座の名をつけることは西洋にあり、さらに意味をつけて占うことが洋の東西をとわずにある。わたしはそういうことに無関心だが、たいへん気にする人がいて、わざわざわたしのを調べて羨ましがったりしてくれる。そんな一人が「魚座」についてのぼうだいな知識を

ひれきしてくれたことがある。かれの本の著者紹介欄には二月生れと書いてあるが日が記してない。かれの知人の女性から「原田先生と同じなのがてれくさいんですよ」と告げられて、唖然としたものである。

袁中郎の例の詩は「百年碌碌すべてかくの如し、従前を検点するに事事虚し」と結ぶ。陶淵明の「帰去来の辞」の「今の是にして昨の非なるを覚る」を心においての句だろうが、そのまま故郷に隠居してしまうことはできず、次の年、三十一歳、はやくも上京して順天府の教授となり、三十二歳、国子監助教に昇任。三十三歳、礼部儀制司主事に転じ、その十一月に兄の宗道が死ぬと、自分も役人をやめるつもりになった。しかし一族をかかえて生計を背負わねばならぬ身には許されず、三十九歳、原職にかえり、四十歳、吏部験封司主事、四十一歳、吏部考功員外郎、四十三歳、吏部稽勳郎中に昇任、休暇をもらって帰省中、九月六日、病没した。文学者としての活動も盛んだったが、若いころの行き方に対しては反省的になっていた。とはいえ、その十三年は、官僚としても、文学者としても充実した後半生というに足る。

わたしも三十歳の前後、家計を維持するための職業がいやでたまらず、三十六歳、その職を捨てて事務兼任の教員に転じた。これが前職をはるかにしのぐ重労働で、精神的な煩いも多かった。それでもあしかけ二十六年勤め、定年を待たずにやめた。これからは、読めなかった本も読み、聞けなかったレコードも聞き、行けなかった旅行もし、と大いに楽しんでいたが、やめても別の義務はあり、うろうろしているうちに十五年たってしまった。老人のわたしが若死した中郎の口吻をまねるのは気恥ずかしいが、文字どおり「従前を検点するに事事虚しく」百年も生きることはなかろうが「碌碌すべてかくのごとし」であることは間違いない。

みかん

1993 02 14　原田　慶

それは寒い晩でありました
月が皎々と冴えわたっておりました
小さな寺の境内の隅に
みかんが
たった一つだけ
忘れられたボールのように
ひねこびた背丈の低い木の上に
ぽつんと座っておりました

それはたぶん夏蜜柑という種類であるのでしょう
大きなタラヨウとひょろひょろ伸びた桧にはさまれて
春にはアブラ虫にたかられ蝶の幼虫に葉をかじられ
あげくのはてに新しい芽をすっかり切り取られ
咲かせた花も実にならないのでありました

それでも一度だけ十個あまりも
実をつけたことがあつたのですが
酸っぱくてだれもが
ふるえあがってしまいました

鳥もヒヨドリも
もちろんメジロなどは見向きもしません
だれにも気づかれずに大きくなった
黄金の実が
緑の葉の上で
光っているのは
満月を見るのと同じほどに
うれしいものではありませんか

月は銀色に光ってみかんを照らしました
みかんは少し首をかしげ月を見上げておりました

月もみかんもひとことも話しませんでしたが
みかんはその夜
とくべつに美しく輝いて見えました
タラヨウや桧はこごえたようにそよとも動かず
月は高く空の頂を
ゆっくり西へ渡ってゆきます
ベートーヴェンのピアノ曲なんかはながれてこず
鎖を解かれた犬がはあはあと
息を切らして走りまわることもなく
職を失った男がとぼとぼと
帰ってくるなどということもなく
冬の夜は静まりかえっておりました
みかんはほんとうに一つだけ
枝の上に
しいんと光っておりました

フロシキ来たる

1993 02 20

原田憲雄

来翰を整理していたら森安太郎氏の一九五七年の賀状が出てきた。お年玉くじ付き官製はがきで、上部中央に金石文の「寿」の字を朱色で手書きし、その下に漢文の長い題をつけた漢詩が謄写版で印刷してある。それを仮名交じり文に直して次に掲げる。

余、登校の日、複子（フロシキ）を抱えて、形影あい依るがごとし。或るひと余を称して「風呂敷」という。よって狂詩「複子来たる」を賦す（山陽の「蒙古来」に和す）。

髪首（こんしゅ）洋装にして脚力を信（の）べ、飄然として去来するも是れ賊ならず。複子来たる、北より来たる。京女（きょうじょ）の教諭これ其の職。大廈高楼一峯を圧し、才媛八千女児の国。増山（ますやま）祭酒（さいしゅ）規矩厳に、幾百の賓師おのおの徳あり。複子来り、斯の道を説く。孔・孟なるか仏・耶なるかを論ずるなく、育英にこれ努め老いを知らず。身は無骨なれども、形は方なるあり。性命を諳（そら）んじ、行蔵を識（し）る。恨むべし一片の方布大風に付す。追うを休（や）めよ千古万古空空に帰するを。

題の末にことわり書きしてあるように、この詩は、頼山陽が『日本楽府』におさめた「蒙古来」のパロディーである。

氏には『黙然論考』（一九三九年）『六宗考（方神考）』（同年）『殷商祖神考』（一九四五年）『黄帝伝説―古代神話の研究―』（一九七〇年）などの著書があり、中国神話の研究者である。『黄帝伝説』の跋に、

私は小学校を出て二十才まで表具屋の丁稚をしていたが、…皇漢医新妻荘五郎先生の忠告に従い表具職を止めることになり、銀行員・歯科医の書生を経て、二十四才で私立中学に入り、三十八才で龍大を出た…といい、龍谷大学同窓会名簿によれば、昭和九年三月、文学部支那学科を卒業、同十三年三月、研究科を卒業している。「三十八才で」というのは研究科の卒業を指すのであろうか。いずれにしてもわたしよりは二十歳前後年長で、数年はともに同じ大学に通い、すぐれた先輩として名は聞いていたが面識はなく、一九五四年、わたしが職をかえて新たに勤めた女子学園で、はじめて出会った。そっけない感じだった。しかし付きあってみると、親切な人であった。学生たちの間では　声が大きく、授業に熱心な先生と評判されていた。

銀閣寺に近い左京区浄土寺西田町に家があり、そこから東山七条までの約六キロを歩いて通われた。いがぐり頭で、帽子はかぶらず、たくさんの教材を風呂敷に包んでさげ、鉄鋲をぎっしり打った靴を踏み締めて、ごつごつと、しかしそうとうな速度で歩く姿は、けっして「飄然」でもスマートでもないが、人目をひくに充分であった。冗談などいう人ではないのに、そのごつごつしたのがなんとなくユーモラスであった。

当時、親子ほどに年は違ったが、やはり同僚だった杉本秀太郎氏が、この「森先生」の「気象人」としての風貌を「市井の人」という一文に描き、『洛中生息』に収めた。

一九八二年の賀状は、ペンで「私は本年で八十才を越えることになりました　柄にもない学問などを修めることにしたものですから　ろくなことにならず後悔していますが　今更何の役にもたちません」としたためる。景色ばかりときには恐ろしいほどの氏の、これが後輩に示すはにかみだった。万古空空に帰したフロシキ先生。